

## [ 概要 ]

本研究では富山市の中心市街地を事例として、直売活動の実態と生産者を取り巻く状況を調査し、生産者からみる直売活動の機能と存続要因について比較検討を行うことで中心市街地における直売活動の展開を明らかにすることを目的とした。

富山市の中心市街地には、大正時代から続く「大手町通り朝市」が今日まで残存している。城下町のメインストリートで行われる大変栄えていた定期市であった。戦後の復興によって大手町通りが町の中心部ではなくなってしまったものの、歴史的な朝市が今日まで続けられている。近年になり、中心市街地において直売活動が増加した。これは中心市街地の発展に向かう地域の動きと、食の安全を求める声が重なって多様に増加してきたことが明らかとなった。

地域の変容に伴って増加した直売活動は、生産者にとってそれぞれ農産物の販路が拡大するという機能を有していた。また、その機能によってコミュニティが醸成されるという副次的機能もみることができた。次に、直売活動の存続要因に違いがみられることが明らかとなった。朝市や夕市は慣習的に残された定期市ではあるものの、顧客の存在が存続に大きく関与していることが分かった。一方で常設の直売所は、中心市街地に立地していることで農業に対する意欲が向上していることが存続の要因であると位置づけた。農業従事者の高齢化が背景となり、「出荷しやすい環境」と「負担の少ない販売方法」によって農業に関わり続けることができると言える。

常設の直売所に代表されるように、直売活動は地域の変容や農業従事者の高齢化といった様々な社会の変化に適応しながら、生産者にとってより販売しやすい形態へと発展していると言える。しかし直売活動が多様に変化する一方で、歴史的な定期市が残存していることは地域にとって大変誇らしいことであり、直売活動の原形をこれからも残すべきであるとも考える。

富山市の中心市街地には、以上のような現状を踏まえながら朝市や夕市と常設の直売所が併存している。